

まちづくりの実践

生活と気質、より良い街づくりのために

2018.10.10 to

1. はじめに

街づくりについては住民主体・住民主導が不可欠であることから、住民の意識改革を唱える研究家・実践家が実に多い。しかしながら、彼ら（の多く）は、意識改革について一体何をした（している）のであろう。唱えの後が続いていないのが実状である。たとえ、対応策を講じても、住民に将来どんな街にしたいかを考えることが必要であっても、そこに至るまでの地域や風土の歴史や個性とともに人間存在の視点が霞んでいるためか、「住民のレベルが低い」とか「だから専門家が主導する」といったことが横行しがちなのではなかろうか。

そこで著者は、こうした問題に対処するため（より良き街づくりを推進するため）に、「そもそも街生活・街住まいに住民はどう営んでいくのであろうか」を考えたくなった。ここでは街づくりを念頭において環境と人間という枠組みで人間の気質に着目し、気質の育まれ方や今日的な社会変化への対応具合を検討することにした。

扱う問題は、

- (1) 移住者と既住者とのコミュニティ形成における意識、
- (2) 地域での近代化受け入れと地域固有の歴史との関係（生活圏と生業の変化）、
- (3) コミュニティにかかわる積極性と消極性のそれぞれの役割、である。

なお、対象地域は富山とし、富山人気質がベースとなる街づくりの展開を念頭に置いていることを冒頭断つておく。

2. 論点

特に関心ある論点は以下の三点である。

- (1) 観光や移住定住促進の施策において、富山人の気質がブレキになるという判断に基づいて、富山の精神構造を変えていくべきという動きがある。これについての是非は如何に。
- (2) 街づくりや地域活動において、地域への移住定住者と既住民との間の少なからずの軋轢を旧態依然とした困難とみるのか、今後の街における新陳代謝とみるのか。
- (3) 気質の多様化に活路を見出す。変えなくてもいい気質と今日的な状況に応じて変えていく気質とがあるとして、これを気質の多様性ととらえ、目的に応じて、時代の要請に応じて、両者同時対立＆共存の道を開けるかどうか。

3. 今日的気質議論

3.1 地域と気質

地域に脈々と流れる精神性として気質に着目して、地域の精神文化の源としての人間性をクローズアップしてみよう。なお地域では、地域環境と地域住民とを一体で捉えることにより、気質が住民の精神性をよく表しているとした。

3.2 気質の捉え方

(1) 気質の定義

気質とは、環境を同じくする人たちの間にみられる特有の気風・性格と捉え、これを個人の次元と集団の次元とに分け、前者の場合は、几帳面、社交的、こだわりなどがあり、性格も含め、後者は富山人気質や若者気質とかいったことがあるとした。

(2) 気質のつくられ方と発揮され方

気質は最初から兼ね備わっているわけではなく、地域における生活の営みから意識として自然と培われ沈着してきたものと考える。

- ・自然条件、社会条件をもって風土の創生。
- ・居住からの積み重ね

(3) 気質の生活における顔

- ・気質と生活において：気質はどんなときに現れ、生活への効用は。
- ・気質の時代性として：気質はどう形成され受け継がれていくのか。
- ・気質の社会性として：気質の評価、背後の価値観（社会性）や時代性は。

今日的問題；・合理主義と地方土着主義　・商業至上主義と土着主義、・排他と自由

4. 富山人気質のルーツと育み

富山地域における生活の営みから自然と培われ沈着してきたものと考えて；

(1) 地域の面的広がり

富山全体がコンパクト（広くない扇状地平野）かつ農耕社会ゆえ、共同体意識や環境と一体の意識が強い。これが他の地域との交流の必要度を下げ、時には閉鎖的ともなって独特の気質を生み、場合によってはしがらみ（固定的思考と制度）も根強く残り気味である。

農耕社会のなごりとしては、身の丈思考や平均化思考があり、これが事に対し「なれ」と「あきらめ」にもつながりがちとなる。また、平穏安定な社会では、感覚のなれが一方では無意識化を、他方では生活への定着をもたらすといえる。

(2) 気質様相（あくまでも一般的傾向）

- ・個人レベルでは頑張り、我慢強い、謙虚、温和、理屈ぱくなく
- ・社会性については（世の中の風潮）

可能性追求（都会志向）。共同体意識、自己主張あまりなく没個性的になることも。

積極的チャレンジよりも安定志向。おらが一番（立山一番）もあれば謙遜もある。

5. 近代化のもとで、都会と田舎の枠組みで

5.1 現代社会

技術の進歩に対応して気質も変わってきている（進化している）

(1) 生活環境の変化、社会基盤の変化

- ・人間の居住空間の性能は向上；年中快適を適宜実現、融雪装置・機械力除雪の恩恵。
- 勤勉→労働節約へ。便利さの恩恵。

・産業構造の変化により農耕社会に起因した習慣や風習が大きく後退。

　　国内グローバル化なる近代化の波が津々浦々まで。

(2) 気質には

田舎では近代化により居住環境が大きく様変わりし、合理主義や商業主義が静かに定着。

経済的な豊かさを求めて地方から都会への流出増。

都会風(近代的)の居住→共同体崩壊ぎみ。 しがらみなしで快適居住。過去の慣習消え

5.2 あらたな地域づくりとして

最近、都会と地方とが共に健全さを求めて、まず地域再生、次いで都会と地域の連携、といった施策が遂行されるようになってきた。すなわち、ゆとり社会をめざして、地方の個性尊重がはじまり、最初に観光資源として文化資源や自然資源の活用から着手が始まった。このおかげであろうか、方言復権とまでは行かないものの、地方の失われたもの失われかけているものへの見直しが急速に進められている。

6. 地域や人の評価について

6.1 地域の評価

(1)誇り 「富山が一番」「おらが一番」というという我田引水的な思考がある。困りごとは二点。第一には、立山あれば自然豊富だから平地の立木を平気で伐採する。第二には、おらが一番のために他地域のことが見え難くなっている。それでいて、すぐに差別化を唱えるためか、相互尊重が育ちにくいうようである。

(2)謙遜 富山第一主義の別の顔として、奥ゆかしさがある。例えば富山の観光資源を評価するときには、「普通、どこにでもある、たいしたことない」ということが結構ある。これは都会人の人には驚きであり、富山人気質と都会的思考とのぶつかりといえ、富山人の奥ゆかしさそのものなのである。今では次のような対応がすすめられている。

・合理主義を一部受け入れ→合理な商業上手へ 　・気質の奥深さ→外への伝え方に工夫。
(3)ビジネスチャンスにて 最近は、若手の方々も含めて商業主義に特化して街づくりや観光もビジネスにしようと戦略を練り戦術を磨いている。この動きが進めば進むほど反作用として、富山人が育ってきた気質や精神性が霞みがちとなる。

6.2 人の評価

自己評価について、行動を起こす前から「だめだ、力ないし、どうせやっても」といった自己否定とも取れる発言をすることがままある。これをどうとるか。額面通りに捉えるのではなく、身の丈にあったとして悩まないという気質とか奥ゆかしさともとれる。

6.3 仲間との区別

共同体はもとより排他的である。なぜ区別かについては、同類の方々で生活するほうが価値観や気質を共有していく円滑になるメリットに加えて共同体意識が強いからであり、ツーカーの世界や日常の当たり前を共有したいからである。

よそ者問題は何処の地域でも一緒であるが、富山城ではよそ者を旅の人といっている。旅の人は地域意識が十分ならず（腰掛の様相）とのことのようである。諸説あり。

7. 街において、

いくつかの問題を設定

7.1 居住について、居住意識から

(1) 県外人の県内居住、溶け込む努力 ひと昔前、移住者が地域に溶け込むために、近所付き合いを活発にして気質の体得をしたものだという。例えば、わざとらしいといわれながらも方言を使う努力があった。今では、地方での社宅やマンションも都会の一部のように捉えられるためか、地方の生活環境はどことなく都会風であり、都会優位ともとれるかのようである。また、人が環境に特別に合わせるのではなく、環境が（都会風の）人に合わせてくれるかのようである。

(2) 県内人の街居住にて

県内人でも、住み慣れた場所はしがらみあり、負担な近所づきあいから逃れるために、新興住宅地に居を移す人が大変多くなっている。そこでは、難を逃れる方々が多いばかりかしがらみがないので、かなり都会風で気楽な居住が可能ということである。

(3) 地域への移住定住について

- ・移住民のとるべき方法は二つあり、地域に溶け込まず自身の流儀を通すか、溶け込んで和するか変えるか、である。前者は非積極性、後者は積極性と捉えることができる。
- ・既住民と移住民との間で区別が自然と差別につながらないように、移住民と既住民との間で非活動的姿勢や非積極性姿勢にもっと意味を見出して、多様性を確保していくべきであると考える。地域ではこうした様相が役割分担を伴って形になるのではなかろうか。

(4) 地域での関係性

地域において地縁が当たり前の関係性である。最近は、しがらみの原因となる地縁の保守性を避け多様な関係性を築くことが多くなってきた。すなわち地縁という結びつきではなく、職場や趣味などのつながりで地域を超えたネットワークというつながりである。こうした新しい種々の関係づけを図ることが多層化の今日的様相といえよう。

(5) 余裕度

移住民と既住民との間には環境の余裕の大小で、軋轢になったり平穏になったりする。都会のようなヒステリックに近い環境では軋轢は激しいものとなるが、富山ではおおらかな自然のもと時間が両者を和していくところもままある。もちろん環境のハードやソフトの整備により余裕づくりも目指さねばならないことはいうまでもない。

7.2 最近の元気者

田舎のおとなしい地域でも元気な人が結構増えてきている。これを地域の都会化や多様化の結果と捉える。田舎では、都会からのU, J, Iターンで、目的意識や情熱は申し分ない元気な若者が増え、地域活動が精力的に進められている。以前は、こうした若者と既従者との

軋轢も少なからずあったが、不思議なことに今では若者に期待する声が高まりをみせ、(極論だが) 邪魔をするのは行政というようにいわれるようになってきた。田舎では、高齢化も進み、若者に帰ってエールを送る(送らざるを得ない)面はあるものの、これまた富山がなせる余裕の業といいたい。

7.3 地域活動について

町内の行事や地域における横の関係(サークルや職場仲間など)での行事について考える。

(1) 各種行事での運営

行事遂行に際しては、(行事に)積極的な人とそうでない人との間に温度差が生じ、積極性の人イコール都会人と決めつけることから両者にわだかまりが生じ、そうした区別がいつしか差別へとかわることもある。解決に向けてはどうするか。非積極性の役割は積極性に関してプレーキの様相だけを問題にすることでいいのか。非積極の在り方が相互尊重のもとで検討されるべきかと思う。

(2) 町内会主導の街づくり

本来は街づくりでは町内会主導は歓迎すべきところではある。しかし、大方は困ることばかりである。一つには、町内会はそもそも行政の下請けであり、下からの意見を吸い上げての活動は望むべくもない。二つには、町内会幹部について街の古株が独占し、既住の若い方々や移住者が全く入り込めない状況にある。こうした会のある地域では、後者の方々が別組織を立ち上げて粘り強く運動することにより、ボス支配の町内会をはねのけるしかも、実際少なからずこれに成功しているところもある。

8. おわりに

近年のグローバルな合理主義が富山にも及び、かつての精神性が厄介者として排除されぎみながら今日に至っている。それでも基本の気質は脈々と流れ受け継がれ、気質はおくゆかしく、相手を立てる様相は今も変わってはいない。これがビジネス目的の合理主義の前に、古びた遺物として気質のリニューアルがしらずしらずのうちに進行する(させられる)こともある。また移住定住問題でも地域の余裕を発揮する形で気質が機能しているともいえよう。地域固有の気質を持ち続けることで、地域の良さとすべきと考える。これをもって、街づくりに資することにしたい。